

〔 一般教養科 〕

〔 区 分 A 〕

佐伯 徳哉

地域史からみた権門体制論の可能性—出雲地域史からの試み—

佐伯徳哉*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

『歴史科学』228号 大阪歴史科学協議会 2017年4月

1963年に故黒田俊雄（大阪大学名誉教授）によって発表された日本中世国家論である権門体制論は、発表後半世紀にわたって、中世における中央の国家機構論に大きな影響を与えてきた。そこで、この学説を批判学説の吟味を通じて再度検証するとともに、さらに日本海西部地域史のなりたちや特徴を整理しながら、この学説を日本海西部地域史にどのように適用しうるかについて論じた。

佐伯 徳哉

「石見肥塚家文書」中世分の翻刻と紹介

佐伯徳哉*1・倉恒康一*2・中司健一*3・西田友広*4・本多博之*5・目次謙一*6

*1新居浜工業高等専門学校一般教養科、*2島根県古代文化センター、*3益田市教育委員会、*4東京大学史料編纂所、*5広島大学大学院文学研究科、*6島根県立古代出雲歴史博物館

『東京大学史料編纂所研究紀要』第28号 2018年3月

戦国時代に石見国那賀郡小石見郷（島根県浜田市）の土豪であった肥塚氏に伝わった中世古文書の調査を踏まえ、既知文書と今回の調査で新たに発見された新出文書を併せて翻刻活字化したもの。翻刻の検討を行った。

佐渡 一邦

On Two Types of Present of Futurity and their Aspectual Difference

佐渡一邦*

*1新居浜工業高等専門学校一般教養科

甲南英文学 No. 32, pp. 57-82 (2017. 7)

英語で現在の中の現在（現在進行形）も単純現在も未来の内容を表すことがあるが両者の違いはアスペクトである。英語のアスペクトの種類や時制との関係について議論した上、前者は未完了、後者は状態やそれ以外のアスペクトすなわち習慣相や完了相を表す傾向が強いとした。

福光 優一郎

Introduction of Team-Based Learning to Technology Education

M. Hirano *1, Y. Fukumitsu *2

*1 Electrical Engineering and Information Science, NIT, Niihama College,

*2 Human Science, NIT, Niihama College

Transactions of ISATE 2017, The 11th International Symposium on Advances in Technology Education, Ngee Ann Polytechnic, SINGAPORE, ISBN978-981-11-5431-7, pp 120-122, (19-22 September 2017)

Purpose: To encourage students to be more active learners, a system of team-based learning (TBL) was employed to remodel the lecture style to ensure active learning. TBL is an innovative teaching method, originally pioneered in business education, which has been increasingly used in medical settings. Engineers are supposed to have the ability to use critical thinking skills and work effectively in a team as part of an overall set of competencies. In order to develop our students' skills and abilities, which are required in engineering fields, we introduced the TBL method and summarized the experience thereof in the present day engineering education.

Methodology: The three principles of TBL are individual and group accountability, need and opportunity for group interaction, and motivation to engage in a discussion. In this method, there are three phases: pre-class preparation, readiness assurance, and application of course concepts. The individual test and group test are done in the readiness assurance phase. In order for this method to work effectively, instructors should emphasize individual and group accountability, give their students individual and group assignments, and encourage a "give and take" discussion. We evaluated the impact of TBL on the academic performance of Year 5 Kosen students at NIT Niihama College by comparing this active learning strategy to a traditional method.

Results: The authors analyzed the results of a questionnaire of fifth-year information science course students at the Department of Electrical Engineering and Information Science. Results show that TBL increases students' engagement in learning, and improves in-class discussions.

Conclusions and recommendations: TBL is an effective method for acquiring skills and knowledge in technology education in Kosen. It also enables students to realize the importance of co-operating with others and facilitates interaction between them to have a better understanding of what they have learned. We hope that the method will be widely used in Kosen education.

[区 分 B]

佐伯 徳哉

『出雲の中世—地域と国家のはざま—』

佐伯徳哉*

吉川弘文館、2017年8月

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

平安時代末院政期から戦国時代までの出雲における中世の形成と展開を題材にした概論。1960年に黒田俊雄（大阪大学名誉教授）によって提唱された権門体制論は、中央国家機構をとらえる学説であったが、本書では、中央権力と地域社会との緊張関係の中で、地域的にこの体制がどのように展開したのかについて論じた。また、地域史の政治・経済・宗教などのトータルな動きから体制史全体を通観する方法論を提示した。出雲の中世史全体を通論する著書としては初めてのもの。

佐伯 徳哉

いづも財団叢書『出雲大社門前町の発展と住人の生活』

佐伯徳哉*1、長谷川博史*2、山崎裕二*3、岡宏三*4、廣澤将城*5、永瀬節治*6

今井出版1、平成30年1月

*1新居浜工業高等専門学校一般教養科、*2島根大学教育学部、*3いづも財団、*4島根県立古代出雲歴史

博物館、*元大社町史編纂委員、*6 和歌山大学観光学部

第一章「絵図からみた門前町杵築の形成—平安末・鎌倉時代 門前町形成「前史」—」執筆

門前町といえば中世末期の民衆経済が発達し参詣が盛んになって後のものを指すが本論ではそれ以前の鎌倉時代以前の出雲大社門前町形成前史について述べた。交換経済の場という経済的意味における都市的要素と、祭祀・造営事業という宗教機能から生じる都市的要素を明らかにすることを通じて平安末鎌倉時代における中世宗教都市的集落としての杵築の形成を明らかにした。

〔区 分 C〕

佐渡 一邦

On Four differences between Two Metaphorical Expressions of Future

佐渡一邦*

*1 新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要第 54 卷、pp. 63-67、(2018. 1)

英語の時制において現在形で未来の事柄を表す表現には「単純現在」と「現在の中の現在」がある。両者の違いをモダリティ・人間の努力・現在との関連性・現在への近さの観点から比較した。単純現在はモダリゼーション（情報）のみを表し、人間の努力に中立であり、現在との関わりが強く、発話の時点からの距離に中立であるとした。

木田 綾子

杵物語として読む漱石『ころ』

木田綾子*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

新居浜工業高等専門学校紀要第 54 卷、pp69-73、(2018. 1)

杵物語（一つもしくは複数の別の物語を含む物語）は、ボッカチオの『デカメロン』やチョーサーの『カンタベリー物語』など、古くから西洋文学において好んで用いられてきた古典的な文学形式である。この形式は 18 世紀後半から 19 世紀にかけて飛躍的に発展する。

本論は、漱石の後期三部作とされる『彼岸過迄』『行人』『ころ』のいずれも、杵物語として読むことが可能であることを示す。その上で、漱石が西洋文学の影響を受け、伝統的な杵物語の形式を利用しつつも、この形式を独自に発展させ、うまく日本の近代小説に取り入れた点に着目した。とりわけ、杵として設けられた「先生と遺書」が作品全体にどのような効果をもたらしたのかを検証することによって、『ころ』を読み直す。

濱井 潤也

高等専門学校の社会科カリキュラム編成類型と主権者教育の課題

濱井潤也*1、芥川祐征*1、佐伯徳哉*1、小川清次*2、鹿毛敏夫*3、高橋祥吾*4、手代木陽*5、平野淳一*6

*1 新居浜工業高等専門学校一般教養科、*2 大阪府立大学工業高等専門学校総合工学システム学科一般科目文系、

*3 名古屋学院大学国際文化学部、*4 徳山工業高等専門学校一般科目、*5 神戸市立工業高等専門学校一般科、

*6 甲南大学法学部

新居浜工業高等専門学校紀要、第 54 卷、pp15-24、(2018. 1)

2015 年 6 月に改正公職選挙法が可決・公布されたことにより、18 歳以上の学生が新たに有権者として

位置づけられ、2016年の夏の参議院選挙から適用されている。

そのため早急に主権者教育の実施が求められるが、これまでも中等教育における「政治参加と主権者教育」のあり方が問われることはあったにもかかわらず、それを現行のカリキュラムに明確に反映させるほど授業実践は蓄積されてこなかった（全国民主主義教育研究会『民主主義教育 21』第4号、同時代社、2010）。このことについて、飯山尚人は論文「各市区町村における主権者教育の実態と普及実践事情（モデル事業）について」（『選挙時報』2014）において、2010年から2013年にかけて主権者教育に関する啓発事業は年を追うごとに普及してきていると評価した。しかし、ここでの事業は小・中学校における外部講師の選挙出前授業が大半だが、高等学校では受験勉強を理由として敬遠される傾向にあると述べられている。

このようなことから、高等学校において主権者教育のカリキュラムを先行的に開発し、継続的に授業実践をしていくための教育的な環境や条件は十分に整っているとは言い難い。

しかし高専には、本科と専攻科を合わせ16歳から22歳という幅広い年齢層の学生が所属しているため、主権者教育について科目横断的な一貫教育を行うことができる環境が十分に整っている。加えて現行の教育課程では、18歳の学生は高等学校と大学の接続段階に当たるため、主権者教育のカリキュラム開発には18歳前後の時期を継続して教育できる高専が最も適していると言える。

そこで本稿では、全国の高専における社会科カリキュラムの実施状況の調査及びシラバスの収集を行い、その結果を分析することによって現時点での高専における主権者教育の設定状況と課題を抽出することを目的とする。

〔区 分 D〕

佐伯 徳哉

平安末期藤原摂関家の石見知行国支配と対馬海域

佐伯徳哉*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

『島根県古代文化センター研究論集 第18集 石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター、平成30年3月

平安時代末期の石見国の知行国主であった摂関家藤原忠通家の家司受領の動向を明らかにしながら同家が石見国を家産制的に支配したことを明らかにした。また、摂関家が石見国と併せて対馬支配を行うことにより、西日本海から対馬海峡にかけての海域秩序に摂関家の影響力を扶植しようとしたものであったことを明らかにした。

木田 綾子

高専生に薦める本のリスト

木田綾子*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

ラテルネ119号、pp18-19、(2018.3)

図書委員として高専生にどのような本を推薦したらいいのか、悩みながら選定したその過程について綴った。学生が本を手にとるといった直接的な効果についてはあまり期待せずに、しかし、ひょっとしたら今後何らかの形で作品に関心を持つきっかけとなりはしないかと想像しながら選書を楽しんだ。

〔区 分 E〕

佐伯 徳哉

鎌倉期伊予国の支配について―出雲地域史との比較から―

佐伯徳哉*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

伊予史談会 平成 30 年 3 月 1234 回例会、平成 30 年 3 月 11 日（土）、愛媛県生活文化センター（松山市）

平安時代末期から鎌倉時代の伊予国支配について、東・中・南予という地域のなりたちをふまえながら述べた。中世前期では伊予国支配が東予の山陽側を中心に成り立ち、南予支配が希薄であること、伊予国支配にとって郡支配が重要な意味をもつことを述べた。そして、鎌倉時代の知行国主西園寺氏の伊予国支配が、東予にある国衙を拠点に東・中予市支配を行う一方、南予支配は、鎌倉幕府に迫って、それまで宇和郡地頭職を持っていた橘氏から同職を奪取することにより実現させたと考えた。こうして、西園寺氏が知行国主として伊予国一国支配を実現したことを述べた。

木田 綾子

高専におけるドイツ語教育を考える―第二外国語検討部会に参加して―

木田綾子*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

第 47 回高専ドイツ語教育研究発表会（2017. 5）

平成 28 年 9 月末に参加した第 4 ブロックグローバル人材育成事業第二外国語検討部会の報告と、今後の高専におけるドイツ語教育をよりよくするための提案について発表した。とりわけ、部会でとりあげられた、第二外国語としてドイツ語は今後どうあるべきか、高専と大学とでは第二外国語を学ぶ意義は異なるのかという議題に関する意見をまとめた。

木田 綾子

「信頼の置けない枠の連鎖―フランツ・カフカの『城』について―」

木田綾子*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

第 69 回日本独文学会西日本支部学会（2017. 11）

19 世紀は新しい語りの形式や技法の実験にその特徴があり、枠物語もそうした実験とともに発展したが、様々な表現が可能となった 20 世紀においては、枠物語形式はその役目を終えたと言われている。しかし、この形式は決して廃れたとは言えず、21 世紀の現代でもなお繰り返し用いられ、常に新たに受容される重要な文学形式の一種であることに間違いない。

20 世紀のドイツ文学においても、枠物語形式の実験は形を変えて継続されていった。その一つが、フランツ・カフカの長編『城』（1922）である。この作品では、さまざまな人物がいずれも、村を訪れた主人公 K. との会話において長い話をする。村長、橋屋のおかみ、ハンス少年、フリーダ、秘書ビュルゲル、オルガ、ペーパーなどが挙げられるだろう。本発表では、これらを挿話と捉えて、未完である『城』の新たな解釈の可能性を探る。とりわけ、作品の後半に置かれたオルガの長い話に着目する。彼女の話は、他の話と比較して最も伝統的な枠物語形式に近く、一方で、その伝統を一番裏切ってもいるからである。

塚本 亜美

A Comparison of Japanese and English Speakers in Discussions with Reference to their Speech and their Participation.

Ami Tsukamoto*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

2017 Linguistic Institute, 2017年7月

福光 優一郎

倉吉方言の待遇表現

福光 優一郎*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

第4回倉吉ことばの会、平成30年3月31日(土)

日常会話において、意識的・無意識的に会話の相手や会話の話題に上る人物との関係を踏まえたうえで、発話の文末表現を変えている。このような一般的に尊敬語や謙譲語として知られる待遇表現を鳥取県の中中部地区で話されている倉吉方言ではどのように使い分けているのかについて調査を実施し、本方言の待遇表現の体系化を試みた。

濱井 潤也

チャールズ・テイラーの政治哲学の旅路—アウェイ環境におけるコミュニタリアニズム—

濱井潤也*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

京都ヘーゲル読書会平成二十九年度冬期研究会、2018年1月6日(土)

『ヘーゲルと近代社会』『自我の源泉』等の著作で知られるカナダの哲学者チャールズ・テイラーは、これらの著作に見られるようなヘーゲル研究者、あるいは政治・社会哲学理論の研究者として有名である。また現代の政治哲学の分類では、彼はウォルツァー、サンデル、マッキンタイアらと並んでリベラル・コミュニタリアン論争の内のコミュニタリアニズム(共同体主義)の思想家としてもよく知られている。

当然、テイラーのコミュニタリアニズムには、近代的な諸個人とそれを含むより大きな全体との対立を「止揚」することを目指したヘーゲルの思想が基盤として息づいている。しかしテイラーの思想の動機の部分、すなわち何のためにヘーゲルの思想から、彼独自のコミュニタリアニズムを形成したのかという部分を理解するためには、テイラーの理論だけでなく、それを現実の社会問題に適応した実践的な活動にも目を向ける必要がある。

その一例として挙げられるのが、彼の故郷、カナダのケベック州における活動である。テイラーはケベック州政府の委託を受け、通称「妥当なる調整」委員会の共同委員長として、ケベック州が直面する移民との軋轢の問題と、カナダ連邦政府との対立の問題(両者は表裏一体である)を調査、検討し、2008年に2人の共同委員長の名前をとって「ブシャー・テイラーレポート」と呼ばれる報告書『未来の構築—和解のとき—』を執筆している。この報告書では、テイラーがこれまで論じてきたヘーゲルの有機体論やドイツロマン主義における「表現主義」の思想を援用することで、移民を排斥することもカナダ連邦からケベック州が独立する必要も否定し、州の歴史を築いてきたフランス系カトリックの文化を中心とする新たな多文化主義、インターカルチュラリズムを提唱している。テイラーにとっては、この報告書は自身のホーム、すなわち故郷が昔から抱え苦しんできた「ケベック問題」に対して、長年積み重ねてきた思索を用いて自分なりの答えを示すという、まさに彼の哲学の一つの到達点であると言える。

コミュニタリアニズムでは通常、人々の規範意識はその土地の文化に依存しており、自由や権利、平等などのリベラルな諸原則は、その文化に合わせた修正が必要であるということが説かれる。すなわちロールズ以来普遍主義的な性質を持って各地に迫る正義の原則に対して、いわばホーム(グラウンド、タウン)の特殊性を擁護することを目指してきたのである。この点から見れば、リベラリズムやカナダ連邦政府に

対して故郷ケベック州の特殊性を擁護したいテイラーにとって、コミュニタリアニズムはまさにうってつけであった。しかし彼が辿り着いたインターカルチュラリズムは、ともすれば特殊性の擁護に偏重するあまり相対主義的、不干涉主義的になりがちなコミュニタリアニズムの欠点を克服するべく、異なる文化の移民たちを同一のアイデンティティを築いていくパートナーと見なすための同化と統合の方向性も強く打ち出している。すなわちそこが彼らのホームではなくアウェイの場であるような人々との共存を、ホームの擁護と両立させることを目指しているのである。オーソドックスなコミュニタリアニズムから、このインターカルチュラリズムへの彼の思想の変遷を追うには、自らのホームを擁護するために磨いた思想が、同じ場所をアウェイの場として生きる人々に対しても有意義でありうるのかどうかを検討する必要があったはずだ、ということに気付かなければならない。そしてそのためには完全にアウェイの地で自身のコミュニタリアニズムが通用するのかどうかという、本来のコミュニタリアニズムの枠組みを超えた検証が必要になる。すなわち近年報告書の邦訳も出版されたテイラーのケベック州での活動とは異なり、まだあまり知られていない彼の実践的活動のもう一例、タイにおける人権概念と民主主義の発展について論じた1994年の報告書『民主主義への道—タイにおける人権と民主的発展—（以下『民主主義への道』）』を紐解かねばならない。これこそがテイラーの政治哲学におけるミッシング・リンクである。

この報告書は1990年にカナダ連邦政府によって創設され、2012年に解散した公共機関「人権と民主的発展のための国際センター（International Center for Human Rights and Democratic Development）」の活動成果として執筆されている。この機関は他にもケニア、ルワンダ等のアフリカ諸国やメキシコ、ペルー等の南米諸国の人権概念や民主主義の浸透に努めており、アジアにおけるタイの調査と報告を、カナダ人のテイラーと、現地タイ人の国際法学者であるヴィティット・ムンターボーンとが共同で行っている。

テイラーにとって完全にアウェイの地であるタイは、第二次大戦後から幾度となく民主主義への移行を目指しながらも繰り返されるクーデターによって失敗し続けてきたという歴史を持つ。その背景にある「タイ式民主主義」とも呼ばれる、国王や軍部が議会を超えた権力を行使しうる構造や、民主化に先んじて進められた独裁的な自然開発、それに伴うバンコクを中心とする中央都市と地方の農村地帯との意識の差、タイ人の伝統的意識の中に深く根づくピー・ノーン関係（パトロン—クライアント関係）、そしてタイ仏教の影響力等、様々な障害がテイラーの前に立ちはだかる。それだけならまだしも、それらの諸契機が複雑に絡み合い、民主化を推進した時期には党派抗争で情勢が不安定化し、クーデターによって軍部が政権を掌握している時期にはむしろ情勢が安定するという逆転現象が、「そもそも本当に民主主義は推奨されるべきなのか？」という根源的な問いをテイラーに突き付け、コミュニタリアニズムが擁護すべき特殊性の範囲を揺るがすのである。ここにはホームを擁護することに長けたコミュニタリアニズムが、逆にアウェイの共同体に対して何を言うのかという興味深い構造がある。すなわち外野の言うことに振り回されずホームの特殊性を擁護すべしというコミュニタリアニズムの理論そのものが立ちはだかるのであり、それを考慮せずに民主化を押し付けることは、まさに自身が批判し続けてきたリベラリズムの過ちを繰り返すことだからである。

本稿では、この報告書『民主主義への道』をアウェイ環境におけるコミュニタリアニズムの一つの形態と捉え、テイラーが民主主義とタイという異文化との同化と統合をどのように論じているかに注目して読解することとする。それによって故郷ケベックを出発してヘーゲル研究者としてスタートした彼が、ついにケベックを論じるという凱旋に至るまでの旅路の空白を埋め、少しでも明らかにすることが本稿の目的である。

濱井 潤也

チャールズ・テイラーの政治哲学の旅路—アウェイ環境におけるコミュニタリアニズム—

濱井潤也*

*新居浜工業高等専門学校一般教養科

第36回政治哲学研究会、2018年3月3日（土）

[概要は前掲]